

## 包括システムによる 日本人5歳児のロールシャッハ反応

Rorschach Responses of Japanese Five-year-old Using Comprehensive System

東浩司・西尾博行

(水間病院附属臨床心理学研究所)

Koji Higashi, Hiroyuki Nishio

(Clinical Psychology Institute, Mizuma Hospital)

### 要 旨

わが国の健康な5歳児に、包括システムによるロールシャッハ・テストを実施し、包括システムにおける主要変数に関する記述的統計値を求めて、5歳児のロールシャッハ反応の特徴を検討するとともに、健常成人との比較を行い、さらに5歳児の男女間に認められる差異について検討した。

被検者は、5歳児群68名(女児38名、男児30名、平均年齢5.24歳、標準偏差0.53)、健常成人群68名(女性38名、男性30名、平均年齢35.56歳、標準偏差12.39)であった。

5歳児群と健常成人群の2群間で、114変数中71変数に有意差が認められた。また、5歳児群の男女間で有意差が認められた変数は14変数であった。

有意差の認められた変数について考察し、さらに今後の研究上の問題点について論じた。

### Abstract

Individual Rorschach test using comprehensive system was administered to healthy Japanese five-year-old to obtain descriptive statistical data of main variables. Results were compared with those of healthy adults, and sex differences of five-year-old were examined. Subjects are 68 five-year old (38 female and 30 male, average age of 5.24, SD=0.53) and 68 healthy adults (38 female and 30 male, average age of 35.56, SD=12.39).

71 statistical differences were found among 114 variables between five-year-old and healthy adults. Sex differences were found in 14 variables in five-year-old.

Analysis were made on variables presenting statistical differences, and discussions were made for further research problems.

キー・ワード： 幼児のロールシャッハ・テスト、包括システム、記述的統計

Key Words : Rorschach Test for children, comprehensive system, descriptive statistics

## はじめに

成人を対象としたロールシャッハ・テストの研究は、これまでさまざまな領域で数多くなされてきている。これに対し、子供を対象とした研究は、臨床群を対象とした研究がほとんどであり、健康な子供を対象に行われた研究は必ずしも多いとはいえない。

健康な子供を対象としたロールシャッハ・テストの研究としては、Halpern, F. (1953)、Ames, L. B. ら (1974)、小沢 (1970) 等の研究がよく引用されるが、いずれも20年以上も前の研究であり、現在の子供にそのまま適用できるかという問題もある。1980年以降のわが国における研究には、小松 (1983)、眞砂・松島 (1991) 等があるが、いずれの研究も包括システムによってはいない。

包括システムによるロールシャッハ・テストに関心を持つ我々は、わが国の健康な子供を対象にロールシャッハ・テストを実施し、包括システムによって、健康な子供のロールシャッハ反応の特徴を検討したいと考えた。

## 目的

わが国の健康な5歳児に、包括システムによるロールシャッハ・テストを実施し、包括システムにおける主要変数に関する記述的統計値を求め、5歳児のロールシャッハ反応の特徴を検討するとともに、健常成人との比較を行い、さらに5歳児の男女間に認められる差異について検討することが本研究の目的である。

## 方法

### 被検者

5歳児群は、私立幼稚園年長組の園児68名(女児38名、男児30名、平均年齢5.24歳、標準偏差0.53)である。また、高橋・西尾 (1994) の資料からランダムに抽出した68名(女性38名、男性30名、平均年齢35.56歳、標準偏差12.39)を健常成人群とした。

## 手続き

すべての被検者に対して、個人法によってロールシャッハ・テストを実施した。実施法は原則として高橋・西尾に従ったが、5歳児にロールシャッハ・テストを実施する際に、(1)集中力を欠く子供や図版にあまり興味を示さない子供については、飽きと興味の喪失を可能な限り防ぐ目的で、Amesら(1974)が実施したように各図版ごとに反応段階と質問段階を交互に行った点。(2)包括システムでは反応数が14以上なければ有効な解釈ができないとされているが、Amesらの標準データで5歳児の反応数の平均が14未満であること等を考慮して、反応拒否がない場合に限り反応数が14未満の資料も本研究の資料とした点の2点が異なっている。なお反応数14未満の5歳児は3名であり、反応数はいずれも11であった。

コード化は、高橋・西尾の基準に準拠し、大学院生5名に高橋と西尾が加わって全員の合議により決定した。

## 分析方法

5歳児群と健常成人群ごとに主要なロールシャッハ変数の記述的統計値を算出し、すべての変数についてマン・ホイットニーのU検定を行った。さらに5歳児群については、同様の分析法で男女間の比較を行った。

## 結果

5歳児群と健常成人群の2群間で、114変数中71変数に有意差が認められた。また、5歳児群の男女間で有意差が認められた変数は14変数であった。表1に、5歳児群と健常成人群の主要なロールシャッハ変数の記述的統計値を示した。表2は、5歳児群の男女間で有意差が認められた14変数の記述的統計値を示したものである。

表1 健常成人群(上段:N=68)と  
5歳児群(下段:N=68)の記述的統計

変数	平均	標準偏差	最小値	最大値	中央値	歪度	尖度	U-test
AGE	35.56	12.39	20.00	69.00	32.00	0.52	-0.72	**
	5.24	0.43	5.00	6.00	5.00	1.28	-0.38	
R	22.74	5.75	15.00	34.00	21.50	0.41	-1.00	*
	20.93	6.47	11.00	38.00	19.00	0.75	-0.17	
W	11.22	4.41	1.00	24.00	11.00	0.27	0.68	**
	8.37	4.63	1.00	21.00	8.00	0.73	0.23	
D	9.15	4.55	0.00	19.00	8.00	0.50	-0.61	
	9.82	5.17	1.00	23.00	9.50	0.45	-0.25	
Dd	2.37	1.74	0.00	9.00	2.00	1.00	2.39	
	2.74	2.11	0.00	8.00	2.00	0.95	0.32	
S	2.47	1.96	0.00	8.00	2.00	0.76	-0.24	*
	1.88	1.98	0.00	9.00	1.00	1.33	1.75	
DQ+	5.82	2.68	1.00	13.00	6.00	0.58	0.38	**
	2.01	2.25	0.00	12.00	1.00	2.15	6.55	
DQo	14.91	4.60	7.00	26.00	14.00	0.40	-0.64	
	16.13	5.80	8.00	34.00	15.00	0.97	0.61	
DQv	1.88	1.81	0.00	8.00	2.00	1.23	1.63	*
	2.65	2.53	0.00	16.00	2.00	2.50	10.57	
DQv/+	0.26	0.64	0.00	3.00	0.00	2.56	6.20	
	0.13	0.42	0.00	2.00	0.00	3.36	11.15	
FQX+	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
FQXo	16.08	4.08	7.00	27.00	16.00	0.24	-0.29	**
	10.10	3.58	3.00	18.00	10.00	0.23	-0.69	
FQXu	4.46	2.52	0.00	11.00	4.00	0.57	-0.03	
	4.85	2.69	1.00	16.00	5.00	1.19	3.17	
FQX-	2.07	1.59	0.00	8.00	2.00	1.24	2.64	**
	5.88	4.18	0.00	18.00	5.00	0.82	0.39	
FQXNone	0.12	0.32	0.00	1.00	0.00	2.43	4.01	
	0.09	0.33	0.00	2.00	0.00	4.12	18.03	
MQ+	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
MQo	3.16	2.08	0.00	9.00	3.00	0.74	0.09	**
	0.65	1.34	0.00	7.00	0.00	3.00	9.78	
MQu	0.40	0.67	0.00	3.00	0.00	1.76	2.90	*
	0.21	0.56	0.00	3.00	0.00	3.16	10.76	
MQ-	0.15	0.40	0.00	2.00	0.00	2.75	7.47	
	0.26	0.70	0.00	4.00	0.00	3.54	14.28	
MQNone	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
S-	0.29	0.55	0.00	2.00	0.00	1.73	2.16	*
	0.66	1.02	0.00	5.00	0.00	2.05	5.15	
M	3.71	2.43	0.00	12.00	3.00	0.96	1.08	**
	1.12	2.08	0.00	10.00	0.00	3.01	9.97	
FM	4.15	2.34	0.00	13.00	4.00	1.06	2.42	**
	1.38	1.68	0.00	7.00	1.00	1.31	1.20	
m	1.46	1.41	0.00	6.00	1.00	0.85	0.48	**
	0.57	1.00	0.00	6.00	0.00	3.00	12.68	
FM+m	5.53	2.59	1.00	14.00	5.50	0.61	0.74	**
	1.96	2.17	0.00	9.00	1.00	1.28	1.12	
FC	1.68	1.40	0.00	5.00	1.00	0.71	-0.41	**

	0.94	1.40	0.00	8.00	1.00	2.62	9.37	
CF	1.90	1.32	0.00	6.00	2.00	0.56	0.31	*
	1.50	1.48	0.00	6.00	1.00	0.92	0.34	
C	0.15	0.40	0.00	2.00	0.00	2.75	7.47	
	0.09	0.33	0.00	2.00	0.00	4.12	18.03	
Cn	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
ALL C	3.72	2.05	0.00	10.00	3.00	0.74	0.44	**
	2.53	2.13	0.00	10.00	2.00	1.03	1.30	
WGSum C	2.96	1.68	0.00	8.00	2.50	0.66	0.27	**
	2.10	1.76	0.00	7.00	1.75	0.77	0.00	
Sum C'	1.37	1.23	0.00	5.00	1.00	0.83	0.07	**
	0.65	1.22	0.00	7.00	0.00	2.96	11.21	
Sum T	0.74	0.86	0.00	4.00	1.00	1.28	2.07	**
	0.03	0.17	0.00	1.00	0.00	5.70	31.38	
Sum V	0.43	0.61	0.00	2.00	0.00	1.12	0.27	**
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
Sum Y	0.69	0.83	0.00	3.00	1.00	1.28	1.37	**
	0.04	0.27	0.00	2.00	0.00	6.56	44.70	
SumShd	3.22	2.06	0.00	8.00	3.00	0.40	-0.31	**
	0.72	1.39	0.00	9.00	0.00	3.71	18.59	
Fr+rF	0.29	0.57	0.00	2.00	0.00	1.84	2.44	**
	0.01	0.12	0.00	1.00	0.00	8.25	68.00	
FD	0.59	0.80	0.00	3.00	0.00	1.44	1.84	**
	0.01	0.12	0.00	1.00	0.00	8.25	68.00	
F	9.29	4.13	3.00	25.00	10.00	0.70	1.72	**
	15.37	5.71	2.00	31.00	14.50	0.56	0.30	
PAIR	5.97	2.69	1.00	14.00	5.00	0.72	0.35	**
	4.75	3.22	0.00	14.00	4.00	0.69	0.17	
3r+(2)/R	0.31	0.13	0.04	0.68	0.30	0.51	0.48	**
	0.23	0.15	0.00	0.59	0.21	0.53	-0.47	
LAMBDA	0.78	0.50	0.17	2.78	0.65	1.50	2.95	**
	5.56	5.99	0.15	30.00	3.45	2.03	4.10	
EA	6.68	3.24	1.50	17.00	6.00	0.98	1.36	**
	3.22	2.79	0.00	11.50	2.50	1.27	1.59	
es	8.66	3.66	1.00	19.00	9.00	0.27	0.15	**
	2.68	2.81	0.00	14.00	2.00	1.59	3.03	
D	-0.57	1.31	-4.00	3.00	0.00	-0.31	1.37	**
	0.07	0.78	-4.00	3.00	0.00	-1.11	13.45	
AdjD	-0.26	1.38	-4.00	4.00	0.00	0.28	2.44	**
	0.12	0.70	-3.00	3.00	0.00	0.10	9.35	
Active	5.66	3.03	1.00	12.00	5.00	0.37	-0.48	**
	2.40	3.12	0.00	15.00	1.00	2.01	4.47	
Passive	3.65	1.99	0.00	9.00	3.00	0.47	-0.34	**
	0.68	1.07	0.00	6.00	0.00	2.49	8.52	
Ma	2.16	1.91	0.00	8.00	2.00	0.93	0.51	**
	0.90	1.80	0.00	9.00	0.00	3.12	10.98	
Mp	1.56	1.39	0.00	5.00	1.00	0.57	-0.72	**
	0.22	0.57	0.00	3.00	0.00	3.00	9.76	
Intelle	0.87	0.99	0.00	3.00	1.00	0.94	-0.17	**
	0.38	0.81	0.00	4.00	0.00	2.99	10.43	
Zf	13.44	4.36	3.00	23.00	13.50	0.03	-0.12	**
	9.12	4.46	3.00	23.00	8.50	1.12	1.15	
Zd	-3.29	4.50	-15.50	5.50	-3.25	-0.54	0.25	
	-2.35	5.16	-19.50	6.50	-1.75	-1.08	1.69	



AG	0.44	0.89	0.00	5.00	0.00	2.96	10.88	**
	0.12	0.32	0.00	1.00	0.00	2.43	4.01	
CFB	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
COP	1.38	1.40	0.00	7.00	1.00	1.48	2.91	**
	0.25	0.97	0.00	7.00	0.00	5.68	36.77	
CP	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	
MOR	0.35	0.66	0.00	3.00	0.00	1.98	3.72	
	0.71	1.22	0.00	6.00	0.00	2.05	4.70	
PER	0.37	0.73	0.00	3.00	0.00	2.13	4.13	
	0.57	1.60	0.00	9.00	0.00	4.05	17.75	
PSV	0.38	0.57	0.00	2.00	0.00	1.21	0.54	
	0.85	1.47	0.00	8.00	0.00	2.80	9.48	

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

表2 5歳児群女兒(上段:N=38)と男児(下段:N=30)で有意差のみられた変数の記述的統計

変数	平均	標準偏差	最小値	最大値	中央値	歪度	尖度	U-test
Dd	2.18	1.86	0.00	8.00	2.00	1.26	1.96	*
	3.43	2.22	0.00	8.00	3.00	0.68	-0.53	
DQ+	2.63	2.61	0.00	12.00	2.00	1.91	4.50	**
	1.23	1.36	0.00	4.00	1.00	0.88	-0.40	
DQo	14.97	5.82	8.00	34.00	13.00	1.39	1.92	*
	17.60	5.52	10.00	32.00	17.00	0.68	0.20	
DQv	2.03	1.82	0.00	8.00	2.00	1.48	2.87	*
	3.43	3.07	0.00	16.00	3.00	2.43	9.01	
FQXu	4.08	2.22	1.00	9.00	4.00	0.36	-0.87	*
	5.83	2.95	1.00	16.00	5.00	1.51	3.80	
S-	0.47	0.95	0.00	5.00	0.00	3.26	13.54	*
	0.90	1.06	0.00	4.00	1.00	1.14	0.99	
F	14.13	5.79	2.00	31.00	13.00	0.92	1.22	*
	16.93	5.28	7.00	30.00	17.50	0.30	0.20	
ColShdB1	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	...	...	*
	0.13	0.43	0.00	2.00	0.00	3.49	12.51	
Popular	3.08	1.44	1.00	6.00	3.00	0.08	-1.14	**
	1.97	1.19	0.00	4.00	2.00	-0.06	-0.69	
X+%	0.54	0.16	0.26	0.88	0.56	0.02	-0.61	*
	0.45	0.16	0.14	0.73	0.46	-0.17	-0.67	
F+%	0.55	0.22	0.00	0.91	0.60	-0.64	-0.12	**
	0.43	0.16	0.15	0.70	0.45	0.06	-1.04	
Cg	1.82	1.54	0.00	8.00	1.50	1.92	5.91	**
	0.70	0.75	0.00	3.00	1.00	1.09	1.62	
Cl	0.03	0.16	0.00	1.00	0.00	6.16	38.00	*
	0.20	0.41	0.00	1.00	0.00	1.58	0.53	
PER	0.97	2.05	0.00	9.00	0.00	2.95	8.93	**
	0.07	0.25	0.00	1.00	0.00	3.66	12.21	

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

## 考察

5歳児群のロールシャッハ反応の特徴を、健常成人群との比較、男女間の差異を中心に各変数カテゴリーごとに考察する。なお紙面の都合で一部のカテゴリーについては省略した。

## 反応数

反応数(R)が年齢とともに増加する傾向にあることは、従来の研究でも報告されており(小沢,1970; Amesら,1974; Exner,1993)、本研究でも5歳児群のRは健常成人群より有意に少なく、従来の研究と一致した結果となった。

なお、5歳児群の男女間に有意差はみられなかったが、男児がやや多いという傾向がみられた(男児の平均: 22.33、女児の平均: 19.82、 $p < .0853$ )。

## 領域と発達水準

領域使用と発達水準の発達の推移は、Wv → D → Woの順に増加していく傾向がみられることが報告されているが、5歳から6歳児はWvからDへと移行する過渡期であるといわれている。

表3に、本研究で得られた各群の領域使用の比率を示した。

表3 各群の領域使用の比率

	W%	D%	Dd%
5歳児群	40.0	46.9	13.1
女児	42.1	46.9	11.0
男児	37.6	47.0	15.4
健常成人群	49.3	40.2	10.4

表3に示したように、5歳児群は、健常成人群と異なりW < Dであったが、Exner(1993)の5歳児の資料では、W > Dであり、文化による差異の可能性も考えられる。また、領域使用が発達に伴いどう変化するかは、今後の重要な研究課題である。

発達水準 (DQ) は、5歳児群が、統合反応 (DQ+) が有意に少なく、漠然反応 (DQv) が有意に多かった。

次に男女間の差異をみると、男児に特殊部分反応 (Dd) が有意に多かった。これは、井上 (1961) の報告した、プロットの些細な突起に事物を意味づけ、その結果反応数が増加するという、幼児期に特徴的な反応単位のあいまいさの現象が、本研究においても男児の反応に多くみられたことによっていると考えられる。既述の通り、男児の反応数が多い傾向にもこのことが関連していると考えられる。

### 決定因子

#### 形態反応

5歳児群の反応のうち、約73%が純粹形態反応 (F) であった。F%は、健常成人群40.9%に対し、5歳児群73.4%と非常に高い値を示している。この結果をExner(1993)の5歳児の資料と比較すると、アメリカ人の5歳児のF%は39.6%であり、わが国の5歳児群のF%が極めて高いことが明らかとなった。F%は年齢が上がるにつれて低くなるのが過去のさまざまな研究で報告されているが、包括システムによっても、例えば中村ら (1992) の児童青年期の資料を見ると、13歳~15歳のF%は約50%、高橋・西尾の健常成人の資料では45.0%と、年齢とともに低くなっており、従来の研究と同様の結果となっている。このことと関連するが、包括システムでF反応の比率を表すラムダが、日本人では高いことが指摘されている。本研究や中村らの研究、高橋・西尾の研究をまとめると、ラムダは5歳児5.56、13歳~15歳で2.0前後、成人で0.96となり、いずれもアメリカ人の数値を上回っている。とりわけ5歳児群のF反応の多さは顕著であり、今後更に同様の研究を行ってこの点を確認する必要がある。なお、形態反応の平均値は男児が16.93、女児が14.13で、男児が有意に高く、ラムダについても男児7.53、女児3.99であり、ハイラムダ傾

向が男児に顕著であることが明らかとなった。

#### 運動反応

過去の研究では、人間運動反応 (M) と動物運動反応 (FM) は、年齢が上がるにつれて増加する傾向を示し、無生物運動反応 (m) は、全般的に出現率は低い。また、MとFMの比率に関しては、FMの方がMよりも早い年齢で出現し、少なくとも幼児・学童期を通じてFM>Mの関係を保つことが各研究に共通している。

本研究での5歳児群の運動反応は全反応の約15%であった (健常成人群41%)。Mの平均値は、1.12 (Exner:1.70) と過去の研究と近似しており、この年齢では、ほぼ1つのMが産出されるようになっていってよいであろう。一方FMの平均値は1.38 (Exner:5.00) で、過去の研究がMに対してほぼ2倍以上の値を示している事を考えると非常に少ないといえる。このように今回FMが少なかったのは、動物を見ながらも、その運動を擬人化して答える5歳児が多くみられたことが関係しているかもしれない。この結果がわが国の5歳児に一般的な特徴かどうかは、今後さらに検討を要する課題である。

なお、運動反応に男女間の有意差はみられなかったが、女児の中には1人で10個のMを答えるなど、女児に比較的多くの運動反応を示す者が認められた。

#### 色彩反応

5歳から6歳では、成熟した形のFCが出現し始めるものの、まだCF反応の方が多く、FC反応における形態水準も低いものがほとんどである、といわれている。

5歳児群の色彩反応は全反応の12% (健常成人群16%) で、CF+C>FCという従来の研究結果と一致している。しかし、Exnerの資料では色彩反応の割合は約25%で、平均値は、FC:0.71、CF:3.02、C:0.67であり、本研究の5歳児群は色彩反応が少なく、FCに対するCFの比率も低いことが明らかとなった。

## 無彩色反応と濃淡反応

辻・浜中(1958)は、子供では、雲や煙と似た拡散反応が、黒や灰色の無彩色の特徴を用いたのか、あるいは濃淡の特徴によるものなのかを判断することが難しいと述べている。言語能力の未発達な5歳児の場合、コード化におけるこうした問題点があるものの、無彩色反応、濃淡反応の出現率は非常に低いといえる。特に濃淡反応を答える5歳児は極めて希で、材質反応、拡散反応を答えた者はそれぞれ2名のみであり、展望反応を答えた者はいなかった。低年齢の被検者では濃淡反応がほとんどみられないことは、過去の研究とも一致しており、ある一定の成熟性が要求されるカテゴリーである。

## その他

反射反応、形態立体反応(FD)の平均値は共に0.01であり(出現頻度はそれぞれ1)、これらの決定因子が出現することは極めて希である。

ペア反応は、平均値が4.75であった(Exner: 9.08)。井上(1961)によれば、子供の反応特徴として左右対称のプロットに2つの対象を覚覧しても、それらを同一の対象として反応することができないことがまれにみられる。本研究でも、Ⅶ図で「ウシさんみたい。こっち(右側)は本物、こっち(左側)は偽物のウシ」や、Ⅹ図D9領域で、「お話しするみたい。男の子の王様で、女の子の王様」などの反応がみられた。しかし、こうした反応を答えた5歳児は非常に少なく、発達的な特徴というよりはパーソナリティの特徴を表すと考えられる。なお、X+%とF+%で男女間に有意差が認められ、いずれも女児群で有意が高かった。

## 反応内容と平凡反応

### 反応内容

5歳児群で最も出現頻度の高いのは動物反応であった。しかし、A%(動物全体反応と動

物部分反応を合計し反応数で割ったもの)をみると、健常成人群48.5%、5歳児群45.7%で、健常成人群に動物部分反応(Ad)が有意に多い他には、動物反応の出現頻度に両群間の差はみられなかった。

人間反応は、Dragnus, J. G.ら(1967)によると、対人関心や社会的成熟性をあらわすとされ反応内容の中で最も重要視されているカテゴリーである。本研究のH%(人間全体反応と人間部分反応を合計し反応数で割ったもの)は健常成人群が16.4%、5歳児群が10.3%であり、H%が年齢とともに増加する傾向にあるとしたAmesらの研究結果(6歳児: 11%、成人: 24%)と一致している。またALL Hは、健常成人群の平均値5.00に対して、5歳児群では3.53と有意に低かった。

5歳児群の反応内容の出現頻度は、ほとんどのカテゴリーで健常成人群より有意に少ないが、自然反応(Na)は唯一、5歳児群で出現頻度が有意に多かった反応内容カテゴリーであった(5歳児群の平均: 0.51、成人群の平均: 0.22、 $p < .0319$ )。Naは就学前の幼児によくみられる主要な反応内容の一つとして過去の研究でも報告されており(Halpern, 1953; Amesら, 1974)、未成熟性をあらわす内容カテゴリーであるといえる。このことは、本研究で出現したNa反応のほとんどが、DQvや色彩優位の決定因子(CあるいはCF)の反応であったことから示唆されるであろう。

男女間で有意差のみられた反応内容は2つであり、衣服反応(Cg)が女児に多く(女児の平均: 1.82、男児の平均: 0.70、 $p < .0002$ )、雲反応(C1)が男児に多かった(女児の平均: 0.03、男児の平均: 0.20、 $p < .0202$ )。Cgは従来より女性に生じやすいとされている反応であり、一方C1は、現実場面を処理する能力の乏しさをあらわす(高橋・北村, 1981)とされ、女児に比べて男児が現実吟味力の発達が未熟であるとも考えられる。

### 平凡反応

5歳児群の平凡反応(P)と共通反応(C)の頻度は、健常成人群と比べて有意に少なく、この年齢の幼児では、まだ社会的な慣習を十分考慮した行動がとれず、自己中心的な思考をしていることを示している。男女差に関しては、P反応が女兒で有意に多く、平均で1つ以上の差がみられた(女兒の平均: 3.08、男児の平均: 1.97、 $p < .0031$ )。

### 特殊スコア

本研究で5歳児群が有意に高い値を示した変数は全部で16変数であったが、そのうちの6変数は特殊スコアに関する変数であった。

5歳児群が有意に多い特殊スコアは、偏倚言語(DV)、偏倚反応(DR)、不調和結合(INCOM)であった。これに関連して、特殊スコアの合計を求める3変数(Sum6SpSc、Sum6SpSc2、WSum6)も、有意に高い値を示している。しかしこの結果を、成人における思考の障害と同様に解釈してはならないことは、Exner(1986)が述べている通りである。

なお5歳児群では、ダチョウが2人、人が3匹などの数詞の間違いによるDVや、つのあるコウモリ、牙のあるカラス、ワニの口をしたカエルなど、プロットの突起や線などを無視できないために生じるINCOMが多く生じていた。

男女間で有意差のみられた特殊スコアは個人的内容(PER)のみで、女兒に多くみられた(女兒の平均: 0.97、男児の平均: 0.07、 $p < .0030$ )。Exner(1986)は、PERは比較的小児に生じやすく5歳をピークに徐々に減少していくと述べている。この点は今後の研究課題である。

### 今後の課題

わが国の5歳児のロールシャッハ反応を、健常成人と比較し、また男女間の差異を検討したが、本研究の問題点や今後の研究課題について述べたい。

本研究は、包括システムにより、わが国の5歳児のロールシャッハ反応の特徴を明らかにした点で、今後の発達の研究に貢献できると考えられる。しかし、被検者数は68名と必ずしも十分とはいえないであろう。また被検者の精神発達に関する資料は不十分である。本研究の被検者のほとんどが田中ビネー知能検査を受検しており、知的障害児は含まれていないが、今回その検査結果を得ることはできなかった。

ところで本研究では、反応数14未満の5歳児が3名(Rはいずれも11)含まれている。包括システムにおいて記述的統計を求めるには、反応数14以上のプロトコルが用いられる。本研究で反応数の少ないプロトコルを含めたのは、既述の通り、Amesら(1974)などの研究を考慮して、拒否のない場合に限り反応数が14未満のプロトコルも資料として採用したことによっている。したがって、本研究の5歳児の記述的統計を用いる際には、反応数の下限に異なる条件設定(R=11の被検者が3名含まれる)がなされていることを考慮し、反応数や反応数を含む合成変数の解釈は慎重に行わねばならない。しかし、将来被検者数をさらに増やし、反応数14以上のプロトコルに基づく記述的統計を公表したいと考えている。

最後に、本研究の結果をより確かなものとするためにも、包括システムによって、今後も5歳児を対象とした同様の研究が行われることを期待する。さらに幼児期・児童期の各年齢別の記述的統計がわが国においても公表されることを期待している。

## 文 献

- Ames, L.B. et al. (1974) : Child Rorschach Responses. (Revised ed.) New York : Brunner/Mazel. 村田正次・黒田健次訳 (1976) : ロールシャッハ児童心理学 新曜社
- Dragnus, J.G. et al. (1967) : Studies of Rorschach Content : A Review of the Research Literature Part I : Traditional Content Categories. Journal of Projective Techniques and Personality Assessment, 31, 3-32.
- Exner, J.E. (1986) : The Rorschach : A Comprehensive System. Volume 1 : Basic Foundations. 2nd ed. New York : Wiley. 高橋雅春・秋谷たつ子ほか監訳 (1991) : 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上・下) 金剛出版
- Exner, J.E. (1993) : The Rorschach : A Comprehensive System. Volume 1 : Basic Foundations. 3rd ed. New York: Wiley
- Halpern, F. (1953) : A Clinical Approach to Children's Rorschachs. New York: Grune & Stratton. 本明寛監修 富田正利・松本忠久訳 (1971) : 児童臨床のためのロールシャッハ診断実務教育出版
- 井上和子 (1961) : 児童のロールシャッハ反応—“反応のあいまいさ”について—ロールシャッハ研究 4, 10-27.
- 小松教之 (1983) : 幼児のP反応に関する一研究—ロールシャッハ研究 25, 134-143.
- 眞砂美紀・松島恭子 (1991) : 幼児のロールシャッハ反応—発達の観点から試みた幼児の知覚分析— 大阪市立大学生生活科学部紀要 39, 243-253.
- 中村紀子・佐藤豊・藤岡淳子・寺村堅志他 (1992) : EXNER法による児童青年期のロールシャッハ・ノーマルデータの基礎研究 安田生命社会事業団研究助成論文集 28, 70-74.
- 小沢牧子 (1970) : 子どものロールシャッハ反応 日本文化科学社
- 高橋雅春・北村依子 (1981) : ロールシャッハ診断法 サイエンス社
- 高橋雅春・西尾博行 (1994) : 包括的システムによるロールシャッハ・テスト入門—基礎編—サイエンス社
- 辻 悟・浜中薫香 (1958) : 児童の反応. 本明寛・外林大作編: 心理診断法双書 ロールシャッハ・テスト 1. 中山書店, 271-348.

1997年10月17日 受稿

1997年11月13日 受理